

「ダンスビック（並行ダンス）」が、知的障害・自閉症 スペクトラム（ASD）児者に対して持つ意味と実践方法 —援助者とASD児者相互の模倣（imitation）の意味とその実践方法—

会津大学短期大学部 幼児教育学科
市川 和彦

I. 「触れ合う関わり（Contact Communication）」における並行ダンスの位置 と特性、役割

まず、「シンクロダンス（Synchro Dance）」の「触れ合う関わり（Contact Communication）」における位置と特性、担う役割について整理しておこう。

筆者は論文（2016）において「触れる関わり」について論じたが、その上位概念が「触れ合う関わり」である。

「触れ合う関わり」を次のように定義しておこう。

『「触れ合う関わり」とは、他者と場所、時間、行為、風土を共有し、共にそこに在ることと可能となる情緒的交流である』。

その基本的な関わりは、実際に直接相手の身体に触れることを基本としたコミュニケーションであるが、触れる行為のない、たとえばこれから述べる「並行ダンス」も含まれる。他者に触れる、触れられることを回避しようとするASD児者の場合、それが他者に対する不安や恐怖、羞恥によるとしても、ダンスという行為を通して徐々に他者の存在に慣れ、触れ、触れられることへの抵抗を減らし、そのことが「触れるダンス」実践へのきっかけと成り得るだろう。時間をかけて、いずれ他者と実際に身体的にも触れ合うことが可能となるのが最初の目的である。

図5（41ページ）に示したように「触れるダンス」を“卒業”した次の段階として「並行ダンス」への移行過程が用意されている。この場合の「並行ダンス」は以前のそれとはまったく違った意味を持ち、集団の動きに自らを合わせていく協調性を獲得していることが前提となる。また、技術の向上により他者と同じ動きをする一体感や楽しさ、達成感を味わうことのできる、文化としてのダンスへの変容過程を体験することができる。それは、ダンスという文化的営みを通じた自己実現とも言えるだろう。

「触れ合う関わり」は、言葉（言語）が存在しなくても成り立つ。その全体を表したものが図1である。

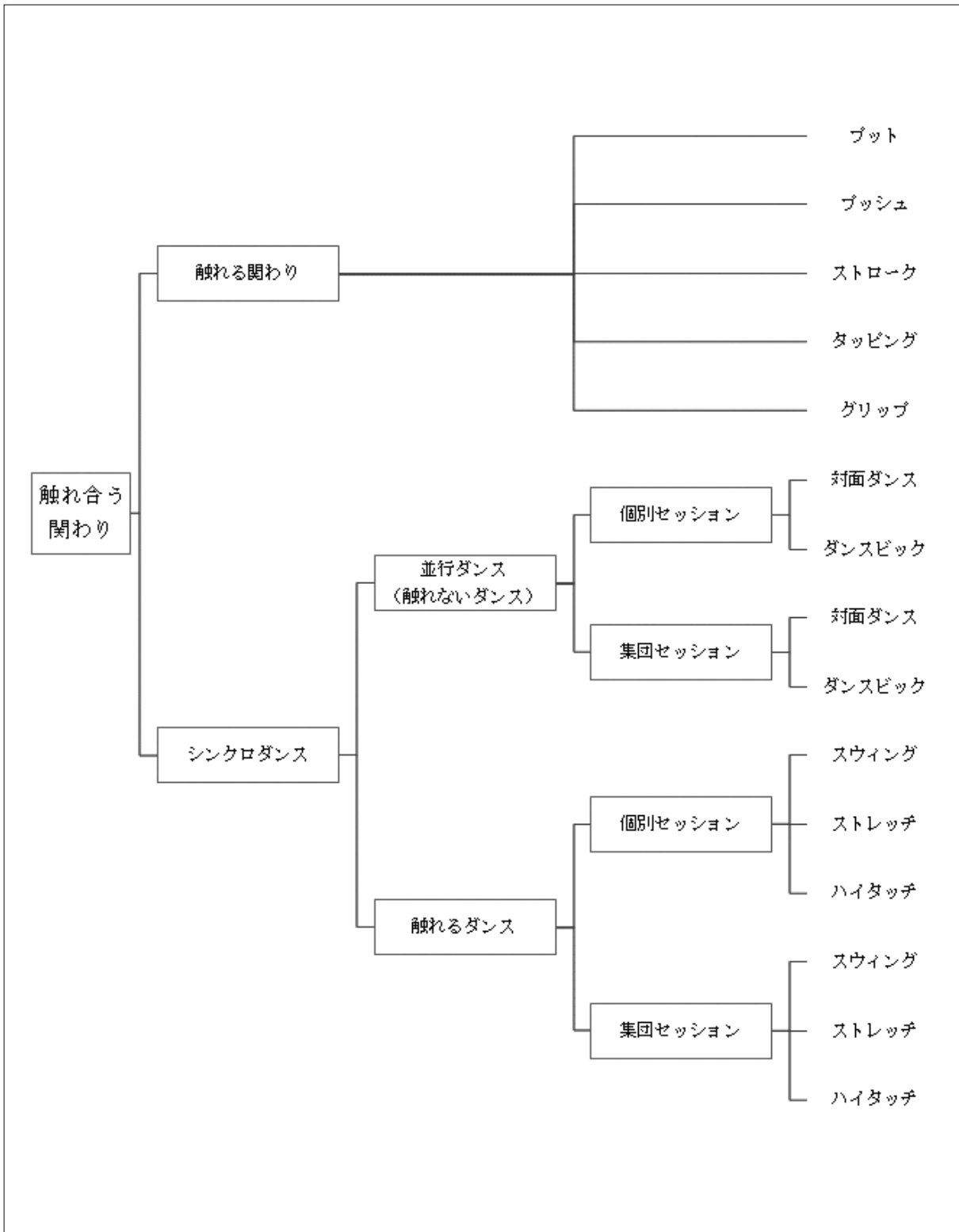


図1 「触れ合う関わり」の構成

本論では「触れ合う関わり」の技法の一つである「シンクロダンス」を論じるわけだが、「シンクロダンス」をさらに、双方いずれかの自発的行動そのものを他者が模倣 (imitation) する「並行ダンス (Parallel Dance)」(身体には触れない) と、受動的また

は能動的に相手の身体に触れることによって実施する「触れるダンス (Reach Dance)」の2つに分類する。本論においては前者、「並行ダンス」について論じると共に、実際の技法について整理する。

「並行ダンス」は基本的に相手の身体には触れないという形態をとるため、触れる行為が介入する「触れるダンス」に比べ他者からの侵襲性は低い。

「並行ダンス」をASD児者と実施する場合、第一に「対面ダンス (face to face)」から始まるのが現実的な流れであろう。後に詳しく述べるが、まずASD児者の常同行動がきっかけとなるので必然的に利用者と援助者の対面で行う1対1の動きが基本になる (個別セッション)。

さらに「並行ダンス」には個別 (1対1)で行うものと、チーム (集団) で実施するダンスがある (図2)。同じ「並行ダンス」ではあるが、「対面ダンス」は、初期段階においては、予め動きを用意せずに、まったく利用者の自発的動きを模倣するもので、利用者は能動的に、援助者は受動的に関わる。しかし、チームによるダンスは予め決められたリーダーの動き (振り付け) をメンバー全員が模倣するものである。その意味では利用児者には自発的ダンスより注意力、集中力、自己コントロール、忍耐力、知的理解と身体の協応、他者との協調性が求められ、対面ダンスより高度なスキルが求められることになる。



図2 チーム (集団) で実施する並行ダンス

ここまですべてを以下に整理してみよう。

「並行ダンス (Parallel dance)」とは、基本的に他者に触れることのないダンスで、向かい合って互いの動きを模倣 (imitation) するものが多く用いられる。ASD児者とのセッションにおいては、この「対面ダンス (face to face)」が実際には用いられることが多いだろう。基本はたとえば利用者の前後、左右に揺れる自発的なロックング (Locking) に援助者が合わせることから始め、タイミングを見て、手首を回しながら上下するトゥエル (twirl: 手首を回転させる) (図3) やギター (funky guitar: ロックギターを引く格好) (図4) など、動きにバリエーションを加え誘導してみる。この援助者から提供された動きを利用者が模倣することができるかが重要な点である。自分勝手な動きに終始していた利用者が相手の動きを模倣、協応することができ、しかも、他者と動きを合わせる

ことを楽しいと感じることができることは、より高次の発達段階で可能となる行為と言える（宇佐川 2007：13-14）。



図3 「対面ダンス」でのトウエル



図4 「対面ダンス」でのギター

それとは別に、メンバーが予め決められた動きに合わせて踊るものがあり、例として「ダンスビック（筆者が創作）」が挙げられる。

宇佐川によれば他者の体の動きを模倣すること（即時対応模倣）は比較的難しく、まずパターン化された同じ動きへの模倣（パターン模倣）の段階からの積み重ねが必要である。次の段階（V水準）¹⁾に至って、複数の動きへの模倣が可能となってくる。よって、対面による1対1による模倣が基本であるので、ある程度1対1対面ダンスに慣れてから集団セッションにチャレンジするのが良い。その際、音楽やダンスを楽しむことでメンバーが自ら他者と関わりたいと思う自発性を喚起することが重要である。

次にセッションを実施する場面であるが大きく次の2場面に分けられる。

- ① 定時：平静時に実施する場所と時間を予め設定し、行う。
- ② 随時：日常的な関わりの機会に必要なに応じて行い、利用者との交流、心の安定等を目的としたセッション。

II. 「並行ダンス」における「対面ダンス」の基本と技法

1. ASD児者の常同行動と模倣行動（imitation）の関係

たとえば、ASDの子どもが脇目もふらずに同じ行動に没頭していることがある（常同行動）。そのときこそ関わるチャンスである。

次はオゴーマンのASD児に関わる際の薦めである。

「たとえば、体をゆすることが目立った行動で、しかもそればかりしている自閉症児がいる。他のすべての試みが失敗したら、子どもと一緒に体ゆすってみなければならぬ。(略) おとなはしばらくの間、注意深く子どもの様子を観察し、子どもを驚かしたり乱暴過ぎるようなことはおしつけずに、終始子どもと活動をともにすべきである」(O'Gorman 邦訳書1970：204)

ASD児との音楽療法の先駆者であるアルバンは、体を動かすことと、対人関係能力の関係について、次のように述べている。「音楽と体の運動とによって作り出された雰囲気または環境の中で、子どもたちは、こうした感情に気づき、そして、うまく処理できるようになっていったように思われる。(略)音楽に合わせて体を動かす楽しさをおぼえた自閉症の子らは、男の子でも女の子でも、お互いに人間的な関係がもてるようになっていった。この活動は、お互いに自閉症というハンディキャップのほかにはほとんど共通点のなかった子どもたちにとって、ひとつの社会化の経験となったのである」(Alvin, J 邦訳1982: 59)。

ローマン、ハルトマンは次のような事例を紹介している。

「クラウディアは、スプーンを即座に投げ、再びなぐり始めた。治療者もスプーンを投げ、足でどんと床を踏みつけた(介入:別の方向に注意を向けること、多くの行動の連鎖と模倣をする)。クラウディアはびっくりして、再びスプーンを床に投げつけ、少し自分をなぐった。治療者は、自分のスプーンを取り、ゆっくり大きな声で「エヘン」といいながら、さらに1さじのヨーグルトを食べた(介入:別の方向に注意を向け、治療者がモデルを示す)。クラウディアは、少しなぐる行為を示したが、治療者のところに近づいてきた」(Rohmann & Hartmann 邦訳書1998: 86)。

自傷行為を繰り返すクラウディアに、まず治療者に注意を向けさせたのは治療者の模倣だった。ローマンとハルトマンは自傷行為を彼らの呈するコミュニケーション手段と理解し、交流の手段として、まず、「子供の行動をゆっくりと、極端に模倣」する方法を挙げている(Rohmann & Hartmann 邦訳書1998: 87)。「子どもが自傷行動以外に1人で何かに従事したり、遊んでいるとき、これらの行動のなかに注意深く入り込み、子どもが他の人と一緒に遊ぶよう指導をする。(略)最初に子どもに何らかの行動を要求するのではなくて、子どもの行動に従う(子どもの行動を模倣する)」と、自傷行為を呈するASD児者への治療について援助者が模倣することの重要性について述べている。特に自傷行為を呈していないときの普段にいかに関わるか、そこが強調したいところである。その具体的方法として「シンクロダンス」の可能性が考えられるからである(Rohmann & Hartmann 邦訳書1998: 84-87)。

ティンバーゲンはASD児には特に遊び的雰囲気が大切であるとした上で次のような事例を紹介している。

「ユトレヒト大学のN.L.J・キャンプ教授はある時われわれに、音楽が聞こえるとからだをゆすり始める(といってもごく単調に、踊る熊のように機会的に動くのである。(中略)女の子に(うしろから手でその子を支えながらついて歩いて)はじめはその動きにごくわずかな変化を加え、その程度をしだいに増していくことによって、その子の「常同行動」を少しずつ着実に変化させ、ついには創作的舞踏に変えていくという見事な実演のフィルムをみせてくれた。このダンスはその後、ひとつの遊びになっていき、子どもも明らかにそれを楽しむようになった」(Tinbergen and Tinbergen 邦訳書1987: 291)。

イacoboniは、他者の言動を模倣する機能を持つミラーニューロンの機能低下がASDの中心的障害であり、「模倣にもとづいた何らかの治療法が社会的困難を抱える自閉症患者を助けるのに非常に有効」であるとの仮説を提唱している（Iacoboni 邦訳書2011：219）。

イacoboniは著書の中で、自閉症患者の治療をしているという男性の印象深い言葉を紹介している。

「何をやっても失敗したとき、私には最後手段があります。それは、たいていうまくいくんです。私の患者のほとんどは、反復的な定型化した動きをします。どうしても通じあえなくて、もうどうしたらいいかわからなくなると、私はその定型化した動きを真似するんです。するとほとんど即座に私を見るので、そこでようやく私たちのあいだに相互作用が生まれ、私は患者の治療が始められるわけです」（Iacoboni 邦訳2011：220-221）。

援助者が利用者の行動を模倣することで共感の細胞であるミラーニューロンを活性化することが可能である。

イacoboniも著書で紹介しているが、フィールド&ネーデルらはASD児を対象とした興味深い実験結果を紹介している。ソファ、椅子、玩具、などいずれも2つ用意された部屋で、あるグループは、他人である大人が子どもの行動を模倣し、別のグループは、他人である大人が、特に子どもの行動を模倣することなく遊ぶ実験を行った。その結果、子どもの行動を模倣したグループの子どもには、大人に視線を向ける、表情が出る、近づく、触れるといった大人との相互的な関わり等が見られた（Field., Sander and Nadal 2001）。この相互的な関わり（相互作用としての模倣）が出現したことが特記すべきことで、利用児者が援助者の動きを模倣することができる段階に至ったわけである。これは相手の動きにミラーリングしようとする能動的行動である。やがて人と人を情動的に通じ合わせる「社会的ミラーリング」を獲得させ、その結果、人と人がかかわる「社会的コミュニケーション」が生まれたわけである（Iacoboni 2011：222）。

模倣は多種多様な動きを獲得するために必要であるにとどまらず、相手の気持ちに共感するところを育てるための礎石である。模倣されることを通して子どもは自分の存在が他者に受け止められていること、自分に関心を寄せてくれる他者がいることを実感するのである（小林・大橋・飯村 2014：114-122）。

2. 関わりの出発としての「対面ダンス」

ASD児者の常同行動としては手のひらをひらひらさせる、指を小刻みに動かす、飛び跳ねるジャンピング、身体を前後左右に揺らすロッキング、くるくる回るターン、胸を規則正しく叩くドラミングなどがあるが、屋根の上で飛び跳ねる、ターンする、バスの中で飛び跳ねるなど、本人にとっても周囲の者にとっても危険な行動、迷惑行動である場合は「対面ダンス」を行わないことは言うまでもない。また、手のひらをひらひらさせる、指を小刻みに動かすなどの小さな身体行動はシンクロさせる対象としては適しない。身体を

前後左右に揺らす「ロッキング」など身体全体を使った動きが適している。本論で対象としている常同行動は主に「ロッキング」と「ジャンピング」である。

すでに述べたオゴーマンやローマンとハルトマン、ティンバーゲン、イアコポーニ、が紹介した事例は、ASD児者の行動を援助者が模倣（imitation）することが彼らの社会的コミュニケーションの形成に何らかの好影響があることを実証している。シンクロダンスの第一の目的は他者との関わりを形成し、育てることである。しかも、可能な限り彼らの世界を尊重する、彼らの世界に援助者のほうから、まずお邪魔させていただくという姿勢である。しかし、タイミングを見て援助者の世界に招待する試みもあってよい。まるでジャムセッションにおいて次から次と演奏者が交替してゆき、周囲の演奏者がそれに即座に合わせていく即興演奏のように。援助者が能動的に働きかける場合は援助者がまず彼らの手を取り（きっかけ：prompting）、「スウィング（図12）」「ストレッチ」「ハイタッチ」（市川 木村2016：240-245）などの行動に誘導してゆく（図5）。彼らから「スウィング」などの援助者から提供された行動以外の、能動的動きが見られた場合は、援助者がその動きを模倣することが優先される。あくまで利用者の自発性がまず尊重される。

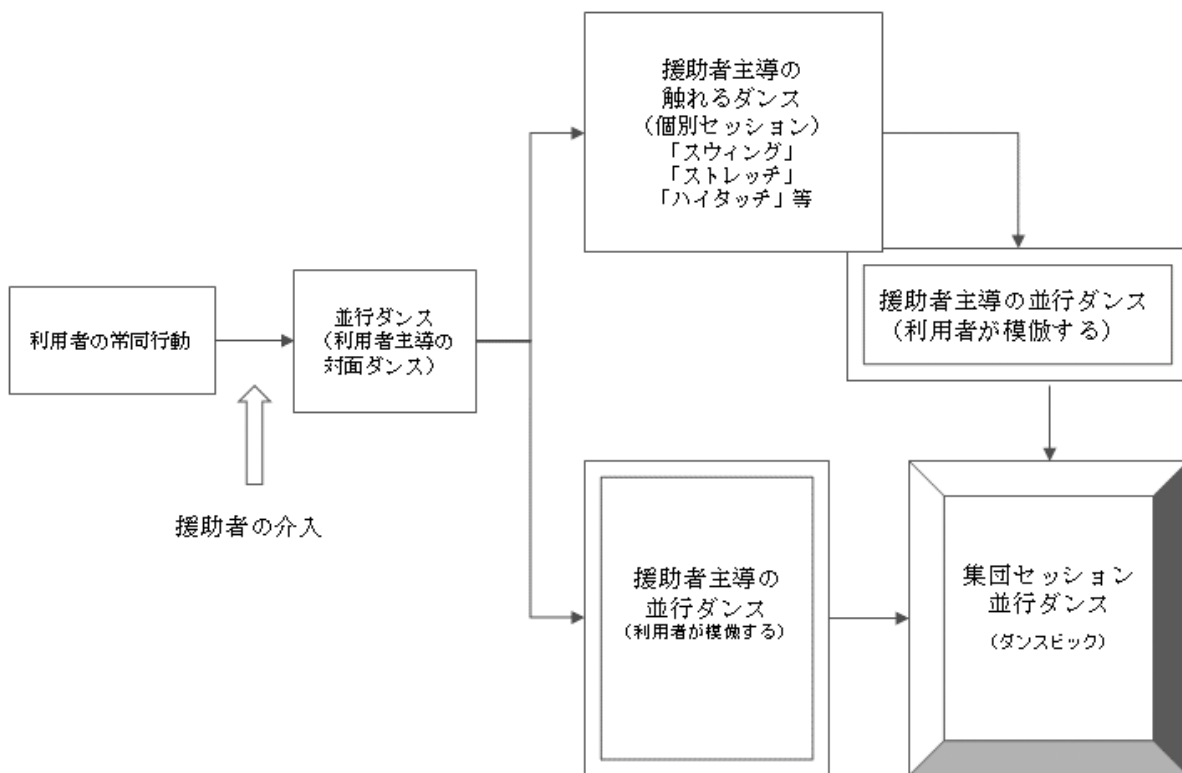


図5 常同行動をきっかけとしたダンスを通した社会化の一過程例

3. 並行ダンスにおける「ダンスビック」の目的、基本、技法

1) 目的

ゲズンハイト・インスティテュートを創設したアダムス（通称パッチ・アダムス）は定期的に患者のためのダンスパーティを開催しており、ダンスが潤滑油となり患者同士のコミュニケーションが促進されたことについて次のように記している。「また、実に興味深いのは、踊っている人が少ないときよりも、大勢いるときのほうが、誰もが疲れを感じず長く踊っていられるということである。人々が集うことで大きなエネルギーが発生し、いつまでも踊らせるのだろう」（Adams&Mylander 邦訳書 1999：132）。

関連して興味深い実験がある。ザックは50代の初めて会った男女複数に集団でダンス（男女ペアで）を踊ったあとのオキシトシン値を測定した。その結果、平均11%、多い人で46%オキシトシン値が上昇した（坂元 2014：134-135）。

対面ダンスによる援助者との二者関係で身体を動かすことや、利用児者が人と行為を共有（シンクロ）することを楽しいと感じることができた場合は、次にチーム（集団）による「並行ダンス」を試行してみる。

事例1：A障害者支援施設で実施、知的障害、ASD者とのセッション。およそ30人参加。50分で6曲を演奏し、中間にダンスビックを挿入した。Aさん（30代、男性）、ステージのすぐ前に立ち、ゆっくりだが規則正しく両手の挙げたり下ろしたりを繰り返している。Bさん（20代、男性）はほとんど体を動かしていないが両手で小さくリズムをとっている。Cさん（50代、女性）は前回り、後ろ回り（ターン）を繰り返している。Dさんはじっと俯いて両耳を塞いでいる。援助者の話によるとまるで水中で音を聞いているように頭の中に響いてくる音を楽しんでいるとのこと。

事例2：B障害児入所施設、C障がい者支援施設で実施、知的障害、ASD者との合同セッション。およそ30人参加。特に児童部の子どもたちはステップや振り付けを予想以上に早く覚えられる。Aさんは男子中学生、Bさんは女子中学生だが、ダンス教室のテレビを観て自分でランニングマンをマスターしており、リクエストしてきた曲を流すと上手にランニングマンを踊る。

事例1のようにASD者は、それぞれマイペースで、それでも音楽に合わせて動こうとしているのが見て取れる。ダンサー（学生）*は予め決められた動き（振り付け）のきっかけ（prompting）を提供する役割で、利用児者は模倣できる部分だけを模倣する。サポーターはフロアに入り利用者の傍らで動きをリード・サポートする。

*ダンスビックには次の役割がある。

メンバー：参加者

スタッフ

リーダー：全体を把握する。ダンスの主たるリーダー。

ダンサー：リーダーとともにダンスのリードをする。モデル（お手本）。

サポーター：おもにフロアでメンバーをフォローする。

2) 基本

動きのきっかけはあまり難しいものではなく簡単な動きを何度か繰り返すものがよい。さらにシンプルにできるものはシンプルにし、模倣しやすいものにする。やや高度なものとシンプルなもの、それぞれ担当するダンサーを決めて、両パターンを示しても良いだろう。多少難しい振り付けは、できたときの達成感が自信につながる。

ヒップホップの基本的なステップをシンプルにアレンジし、何小節かシンプルなステップを繰り返すエアロビックの特性を融合させた「ダンスビック」が適していると考ええる。

3) 集団セッションの実際（ダンスビック・ワークショップ）

次は筆者らが実施している「ダンスビック・ワークショップ」の内容である（所要時間60分）。

プログラム

- ① ストレッチ（10分）
- ② 筋トレ～腹筋、腕立て～（5分）
リラックス（5分）
- ③ ステップ練習（15分）
- ④ 振り付け～ステップの組み合わせ～（10分）
リラックス（5分）
- ⑤ 集団セッション（触れる、または触れないダンス）～スウィング、ストレッチ、
ハイタツ、ロックキング、ジャンピングなど～（8分）
- ⑥ クールダウン（2分）

1) ストレッチ

(1)上半身のストレッチ（①首を横、縦、回す、②腕を横、縦に伸ばす、③肩を回す、④胸・背中を伸ばす、⑤腰を前後左右・まわす）

(2)下半身のストレッチ（①状態を倒して屈曲、②アキレス腱を伸ばす）

(3)フロアストレッチ（①開脚、閉脚で前屈、②エビゾリ）

自発的動きが期待できない場合はサポーターが手を貸す。

2) 筋トレ（腹筋、腕立て伏せ）

腹筋は仰向けに寝て両足を挙げる。挙げる高さによって付加が変わる。腰を痛めないよう、ひざを曲げてても良しとする。腕立て伏せは両膝をついて腕だけで曲げ伸ばしたほうが付加が少ない。

3) ステップ練習

まず、簡単な左右対称模倣から入る（宇佐川 2007：40-41）。左右対称模倣とは、たとえば両手を一緒に前に出すオールを漕ぐような動作であり、ボクシングのパンチのような左右交互の動きより簡単に習得できる。次に、簡単な基本ステップを覚える（1セッションに2～3つ）。

例

- (1) ダウン&アップ
- (2) サイドステップ
- (3) ボックス
- (4) ランニングマン
- (5) ポップコーン
- (6) ニュージャックスウィング

etc

※ いずれも簡単にアレンジしたもの（図6、7）



図6 ボックスステップ



図7 簡単にアレンジした
ボックスステップ（足のクロスを省いたもの）

導入は「ダウン&アップ」から。「ダウン」はビートの表（オンビート）で身体をかがめ、裏（オフビート）で元に戻る動きである（図8、9）。「アップ」はその逆で、ビートの表（オンビート）で上に伸び、裏（オフビート）で身体をかがめる動きである。（図10、11）正確には「ダウン&アップ」はステップではないが、曲のビートにヒットすること、俗に言う「乗る」こと、これがすべての基本であるので、「ダウン&アップ」に慣れることが

まず大切である。ヒットのしかたはメンバーそれぞれのかたちでかまわない。最初は「ダウン」、「アップ」が指示通りにできなくてもかまわない。ビートにヒットすることができれば、それだけでもダンスの楽しさを体験することができる。曲は、メンバーの好きな曲を選ぶと良い。



図8 ダウン 表 (オン) ビート



図9 ダウン 裏 (オフ) ビート



図10 アップ 表 (オン) ビート



図11 ダウン 裏 (オフ) ビート

4) 振り付け (コンビネーション)

1回のセッションでここまで進むことは現実的には難しい。場合によっては「ダウン&アップ」で終了しても良い。あるいはフリーで踊れるメンバーがいればフリーでもかまわない。8小節 (ワンエイト) の振り付けを繰り返す程度が無理がなくて良い。

5) 集団セッション (触れるダンス・並行ダンス (触れないダンス))

集団の中からメンバー同士でペアになって行う。「触れるダンス」は、「スウィング」、「ストレッチ」、「ハイタッチ」(図12)を、「並行ダンス」では「ロッキング」、「ジャンピング」などを入れる。



図12 集団での「スウィング」

6) リラックスとクールダウン

リラックスでは仰向けに寝るなど自由な姿勢で休む。クールダウンでは足首、太腿、股関節、首などを伸ばす。筋肉痛の予防と疲労回復に効果がある。ペアになって「触れる関わり」を行っても良い。

7) 実施するにあたっての注意

(1)上履きはシューズを使用する

サンダルやスリッパは不可。ストレッチは、はだしで行うのが良い。

(2)動きやすい服装

曲げ伸ばしがしやすい運動着が良い。ヒップホップなどのストリート系のファッションを楽しんでも良い。特に女性の場合、肌の露出の多いものは避ける。

(3)ペットボトルなどの持参

かなり汗をかくので小まめに水分を補給する。特に夏季。

(4)ストレッチは十分に行う。

無理がないようにゆっくり行う。必要に応じてサポーターがサポートする。

不十分なストレッチはケガにつながる。特に高齢者や身体に障害がある場合は注意。

(5)異性に対する必要外のタッチは控える

握手、手をつなぐ、背中を押すなどのタッチは許容されるが、撫でる、さするなどは異性間では原則禁忌である。触れられることに恐怖を感じる方の場合や、異性からのタッチが想像以上の刺激になる場合がある。

Ⅲ. まとめ～クロス・ディスアビリティで実施することの意義～

ワークショップは、たとえばASD児者など特定の障害に限定せず、知的障害、聴覚障害、肢体不自由児者などが、“できること”を、“できるペース”で行う。リーチアウト（訪問）型ワークショップの場合は比較的様々な障害の方が参加される。ASD児者の場合、たとえばダウン症児者に比べると参加度合いが低く、事例1のように、ステップができなかったり、身体の一部だけを動かすに留まったり、場合によっては、歩き回ったり、そこに居るだけということである。しかし、周囲のメンバーが放つ躍動感や楽しさのうねりのなかに身を置くこともまた、大切な触れ合う関わりと言えるのである。

また、援助者も利用児者と一緒に身体を動かすことで日常とは違った関わりを体験することができる。

大橋はダンスムーブメントにおいて発揮される3つの力を挙げている。

①「身体意識能力」：「ダンスの動きは無限であり、どんな小さな、例えば指先だけのわずかな動きであっても、表現したい欲求と動きが結びついていれば、ダンスであると受け取ることができます。あらゆる動きがダンスへと発展するのだ（大橋 2008：28）」まさにシンクロダンスの原点である。ワークショップの振り付けは基本的に足の動きだけではなく上半身の動きを意識して作ることで車椅子使用でも参加できる。また、「触れるダンス」では直接相手の手をとって行うので視覚障害児者や聴覚障害児者、重度の肢体不自由児者が参加することも可能である。

②「コミュニケーション能力」：他者とその場を共有し、「リズムの共有」や「ふれあいを通して」喜びを分かち合うことができる。

③「創造力」：「ダンスムーブメント」には「正解」も「間違い」もありません。自分自身で創造する喜びがあります」（大橋 2008：28）。インストラクターは予め振り付けを用意していくが、メンバーの自発的動きを優先的に採用してアレンジしても良いし、ダンスの中にブレイクダンス（一人で自由にアレンジして踊る）を組み入れてメンバーにソロで踊る場面を挿入しても良い。

特に年齢の若い利用者には時代に即したクール（cool）な動き（かっこよさ）が求められている。クールさは、オフビートの拍に乗る「乗り（groove）」がなければ表現されない。強い拍（ダウンビート）が裏（オフビート）でシンコペーションを多用したリズムに乗ること、拍にヒットして乗ることがクールとを感じる要素の一つと言える。某障害者施設の職員に利用者が好む曲は何かと聞いたところ「AKB48」との返事が返ってきた（一昔前では演歌が多かったが）。流行の曲には洋楽・邦楽を問わずに上記で述べたクールでファンキーなリズムの曲が多いので、幼児でもおとな以上に身体でリズムを簡単に受け入れることができる（事例2）。

障害があるからといってお遊戯レベルのダンスで良いということはない。本人が納得し、出来たときにある程度の達成感を感じられるレベルのダンスを踊ってほしい（事例2）。しかし、たとえば、ほとんど反復（繰り返し）の無いヒップホップダンスやジャズダンスを一曲踊りきるには、相当多数のステップをマスターしていることと、そうとうの記憶力が求められる。知的障害やASD児者には至難の業である。むしろパターンの繰り返しの多いエアロビクスのほうが適しているといえよう。しかし、ある程度見せることを目的と

したヒップホップに比べ、体力維持や向上を目的としたエアロビックは若干クールさに欠ける。よって、ヒップホップのステップを基本として同じ動きを一定回数（たとえば8小節）繰り返す「ダンスビック」（筆者が名づけたヒップホップとエアロビックを融合したダンスの造語である）が適していると思われる。筆者は今後「シンクロダンス」を文字通り「ダンス」のひとつと捉え、ダンスそのものの理解に努め、「シンクロダンス」の位置、意味と目的を明確にしたうえで、利用者が教育や治療（セラピー）としての枠から解放され、純粹にダンスを楽しむことができるよう、シンクロダンスの文化としての可能性を探求していきたい。

註

1) 対応知覚水準のことで、外の（他者）動きに合わせてようとする情動や行動の調整意識。この段階では模倣を通して外界への意識が広がり、かつ柔軟性を獲得してくる（宇佐川 2007 16,26-27）。

引用・参考文献

- Alvin, Juliette (1978) *Music Therapy for the Autistic Child*. Oxford University Press.
(=1982山松資文・堀信一郎訳：自閉症児のための音楽療法. 音楽之友社.)
- Adams, Patch with Mylander, Maureen (1993,1998) *Gesundheit!: bringing good health to you, the medical system, and society through physician service, complementary therapies, humor, and joy*, Inner Tradition International, Ltd., Rochester, U.S.A. (=1999, 新谷寿美香訳「パッチ・アダムスと夢の病院～患者のための真実の医療を求めて～」主婦の友社.)
- Field, T., C. Sander, and J. Nadal (2001) Children with autism display more social behaviors after repeated imitation sessions, *The National Autistic Society*, Vol (3) 317-323.
- Iacoboni, Marco (2008) *Mirroring People: The New Science of How We Connect with Others*. (=2011. 塩原通緒訳：ミラーニューロンの発見－「物まね細胞」が明かす驚きの脳科学. 早川書房.)
- 市川和彦 (2015)：保育者・支援者との“触れる関わり”が障がい児者に及ぼす影響－主に自閉症スペクトラム児者（ASD）における人間関係能力発達の視点から考える各アプローチの包括的理解. 所収：会津大学短期大学部研究紀要第72号.
- 市川和彦 (2016)：保育者・支援者と障害児者で実施される“触れる関わり”の実際－主に知的障害・自閉症スペクトラム（ASD）児者における人間関係能力発達の発達を促す技法. 所収：会津大学短期大学部研究紀要第73号.
- 市川和彦、木村淳也 (2016)「施設内暴力－利用者からの暴力への理解と対応－」誠信書房.
小林芳文、大橋さつき、飯村敦子 (2014)「発達障がい児の育成・支援とムーブメント教育」大修館書店,

- 厚生労働省認可 財団法人職業技能振興会監修 (2012) 「FUNK編 ヒップホップ基本技
能指導士検定」財団法人職業技能振興会.
- 菊池貴美子 (2004) 「NHK趣味悠々 レッツフィットエアロビック」日本放送協会・日本
放送出版協会.
- O'Gorman, Gerald (1970) *The Nature of Childhood Autism*, Butterworth & Co., Ltd. (=1970.
白橋宏一郎・大山正博・川口みさ子訳：子どもの自閉症.北望社.)
- 大橋さつき (2008) 「特別支援教育・体育に活かすダンスムーブメントー「共創力」を育
み合うムーブメント教育の理論と実際ー」明治図書.
- Rohmann, U. H & Hartmann, Hellmut (1988) *Autoaggression: Grundlagen und
Behandlungsmöglichkeiten*, verlag modernes lernen, Borgmann KG. (=1998.三原博光
訳「自傷行動の理解と治療～自閉症、知的障害児(者)のために～」岩崎学術出版社.)
- Tinbergen, Niko and Tinbergen, Elisabeth (1984) *Autistic Children: new hope for a
cure*, Verlagsbuchhandlung Paul Parey. (=1987. 田口恒夫訳「改訂 自閉症・治癒
への道～文明社会への動物行動学的アプローチ～」新書館, 85.)
- 宇佐川浩 (2007) 「障害児の発達臨床Ⅲ 感覚と運動の高次化による発達臨床の実際」学
苑社.13-14)。